

オーラルヒストリーによる 現代日本天文学史へのアプローチ

高橋慶太郎
熊本大学大学院先端科学研究部
keitaro@sci.kumamoto-u.ac.jp

1、天文学者へのオーラルヒストリー

日本の天文学は現在世界の第一線にあるが、これは戦後、先人たちが脈々と築いてきた土台の上に成り立っているものである。萩原雄祐、宮本正太郎、畑中武夫、早川幸男、小田稔、林忠四郎などはまさに日本の天文学を起ち上げた人々であるがすでに他界し、草創期を知るものは非常に少なくなりつつある。彼らの直系の弟子たちは現在80～90歳であり、当時の様子を知るとともに日本の天文学を国際レベルに押し上げ、現在の研究体制を苦勞の末作り上げた世代である。彼らに系統的にインタビューを行い、公的な情報資料では残らない、出来事の背後にあるプロセスやニュアンスを歴史資料として残していくこと（オーラルヒストリー）が本活動の目標である。これは現代日本天文学史の貴重な資料となるだけでなく、激動する国内・国際状況に天文学コミュニティがどう対応していくかを考える上でも重要となる。

科学者に対するオーラルヒストリーは欧米ではさかんに行われている。特に American Institute of Physics では約 50 年前から物理学者や天文学者へのインタビューが系統的に行われ、1000 人規模の原稿が公開されている (<http://www.aip.org/history-programs>)。これは国籍を問わず行われており、古在由秀氏や小柴昌俊氏らも含まれている。しかし一人一人のインタビューは1回もしくはせいぜい数回である。

一方、日本国内では科学者に対するオーラルヒストリーの例は極めて少なく、ノーベル賞受賞者クラスの研究者に対するものが散見されるほか、宇宙線研究所、高エネルギー加速器研究機構、核融合科学研究所などで関係者への系統的なオーラルヒストリーが試みられつつある。しかし天文学者についてはほとんどないと言ってよい。本活動はその先駆けとなり、今後こうした活動が認められてさらに広がっていくことを望むものである。

筆者の関心は天文学の歴史だけでなく、天文学者や天文学を通して日本の社会を見るということにもある。天文学という活動は社会から様々な影響を受け、時には与えてき

たであろう。戦後の日本はこれまで多様な観点から角度から語られてきたが、天文学者という「一風変わった人」を通すとまた異なった側面を見ることができるのではないかと期待しているのである。

2、これまでの活動

2012年より筆者は9人の天文学関係者に対して合計50回のインタビューを行っている。以下がそのリストである（年号は生年）。

浦太郎（神戸大学名誉教授）	1920 年	1 回
川口市郎（京都大学名誉教授）	1924 年	5 回
海野和三郎（東京大学名誉教授）	1925 年	4 回
小暮智一（京都大学名誉教授）	1926 年	4 回
西村純（宇宙科学研究所名誉教授）	1927 年	1 3 回
古在由秀（国立天文台名誉教授）	1928 年	1 2 回
佐藤明達（京都大学卒）	1928 年	1 回
杉本大一郎（東京大学名誉教授）	1937 年	3 回
海部宣男（国立天文台名誉教授）	1943 年	6 回

「宮本正太郎先生を語る会」

インタビューは1回2～3時間であり、録音した音声を書き起こすとA4用紙で30～40ページほどになる。インタビューは筆者一人、もしくはインタビュー対象によっては協力者に同席をお願いしている。

インタビューの初回は経歴の確認であり、生年月日、出身地、出身校、職歴、研究歴、研究業績、著書、師弟関係などについて下調べしたものを確認・修正をしていただく。その後、2～3か月に1回のペースでインタビューを行う。進め方としては少年時代、学生時代、研究者時代、退職後と基本的には時系列で伺っていく。その内容は天文学の研究に限らず、初等～高等教育で受けた教育内容、研究者に至るまでの過程、研究者を取り巻く環境、交友関係、太平洋戦争や高度経済成長などの社会情勢など広範囲にわたる。

これまでのインタビューの進捗は様々であり、古在氏、西村氏、川口氏については幼少期から現在まで時系列で追っていくインタビューはほぼ終了し、海野氏、小暮氏、海部氏、杉本氏についてはまだその途上である。インタビューは回数が多ければよいというものではないが、例えば政治家や官僚へのオーラルヒストリーでは30～40回のインタビューを行うことも少なくない。どれだけ深く有益な証言を引き出せるかはひとえにインタビューをする側の準備状況に懸かっており、様々な資料をあたって質問を作成するとともに協力者に同席してもらってきた。例えば古在氏のインタビューでは小久保

英一郎氏（国立天文台）に同席してもらい、専門分野である天体力学について深く伺ったり、海部宣男氏（国立天文台）には同じ元国立天文台長として申請者には引き出せない話題について伺ってもらったりした。また、川口氏や小暮氏のインタビューでは柴田一成氏（京都大学）や浅井歩氏（京都大学）に同席していただき、戦後の京都大学宇宙物理学教室について伺った。

インタビュー内容の一部はダイジェスト版を天文月報にて発表した。

- ・ 2015 年 4・8 月号：古在由秀氏
- ・ 2016 年 2・6 月号：西村純氏
- ・ 2017 年 6・8 月号：川口市郎氏

今後天文月報で掲載していくが、天文月報は紙数が限られているためダイジェスト版とせざるを得ない。何らかの形で完全版を世に出したいと考えている。

3、まとめ

本活動はまだ始まったばかりであり、個人ベースの細々としたものである。今後、より系統的に活動を行うため、以下のような協力者を必要としている。

- ・ インタビューをしてくれる人
- ・ 同席してくれる人
- ・ インタビューを受けてくれる人
- ・ どのような人にどのようなことを聞けば良いかアイデアを出してくれる人
- ・ 資料収集や文献調査をしてくれる人
- ・ 原稿の書き起こしや編集をしてくれる人
- ・ 発表の場を提供・紹介してくれる人
- ・ インタビュー内容をもとに現代日本天文学史の研究をしてくれる人

どのような形であれ興味を持って協力していただける人があれば、ぜひ著者に連絡していただきたい。